
キアラン

玉木 もとか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キアラン

【Nコード】

N9610Y

【作者名】

玉木 もとか

【あらすじ】

悪魔であるキアランと天使のフィオナの恋の物語。

だが、それは禁断の恋で、中々あうことすらもままなら無い二人の出会い。

二人が唯一会える場所である「扉間」が物語の鍵となる。

キアラン 1（前書き）

初投稿の作品になります。

文脈もおかしな所がありますし、アドバイス等がもらえるとありがたいです。

気ままに楽しんでいただけると嬉しいです。

これから、よろしくお願いします。

キアラン 1

「お待ちください！キアラン坊ちゃん！」

屋敷の中をひたすら走った。

黒髪のやや長い髪が、顔に当たる。

俺はそんなことは気にせず^にただひたすら走った。

「お待ちください！」

俺を追いかけているのは、俺の屋敷の家政婦だ。大金持ちと云うことではないのだが、一応貴族である。

そんなことはどうでもいいのだが、なぜ家政婦から逃げているのかと言うとこれから俺の叔父さんが来るからだ。

どうして逃げるかって？

叔父さんは、嫌味臭いし五月蠅いしで、俺はあの叔父さんが嫌いだ。単純に会いたくないのだ。だから、こうして逃げている。

それに、今日はあいつとの約束もあるし――

「じゃあな！叔父さんに、今日は急用ができたから会えなくて残念だ、ってな！」

俺は、窓から飛び降りた。

ここは三階だ。

だが、そんなものは関係ない。

「ま、お待ちください！」

家政婦は、叫ぶがもう遅い。

俺は窓から飛び降りる。だが、地面に落ちてはいない。

なぜなら、俺の背中からは大きな黒い翼が生える。

「じゃあな！」

家政婦に軽く手を振って、翼で空を飛ぶ。

「ちよつと……ダメです！早く戻ってください！」

家政婦は青ざめた顔で俺を止めようとするが、家政婦の言うことなど聞かずに悠々と空を飛んだ。

キアラン 1（後書き）

前書きにも書きましたが、気ままにお楽しみください。
よろしく願います。

キアラン 2

「ふうっ……。これで大丈夫だろ」

とてつもなく速いスピードで、館から一キロほど離れた小さな森辺りに移動した。そして、宙にいますま立ち止まる。

後ろを振り返ると館は小さく見えていた。

きよろきよろと辺りを見渡すが、俺を捕まえるために追ってくる者はいないようだ。人影すらない。

「さてと、そんじゃあまあ行くとするか！結構時間くったけど、余裕が無いわけじゃないし……」

俺は、左腕に巻きついていて腕時計を見る。

待ち合わせの時間は、十時半。

そして、今は十時二十五分だ。

「げっ……！」

扉間という場所が待ち合わせ場所になっている。その扉間に行くには、速くて十分は掛かるのだ。

「速くいかねえと、怒られる！」

大きくて黒い翼をすばやく羽ばたかせながら、扉間という場所に移動して行った。

キアラン 3

俺達は、「悪魔」と言う存在である。悪魔は、ほとんどの者は黒い大きな翼を手をしている。

悪魔と言えど、腹黒い奴やお人好しな奴もいる。まあ、性格も色々あるし、個性豊かだ。

悪魔と敵対する者。それは「天使」だ。

敵対といえるほどのことではないが、悪魔と天使が話し合う場が月に一度ある。そのときには、ほとんどの時に批判の口論が飛び交う物だと聞いている。

ま、俺は天使のことについてはあまり知らないが、いじめ外があるのだけは分かる。

悪魔がいるのは「地界」。そして、天使がいるのは「天界」だ。

悪魔は天使のいる「天界」には入れない。それと同様に、天使は「地界」には入れないのだ。

そして、悪魔と天使がいられるのは「扉間」と言う空間。

扉間は、空間が埋め尽くされるほどの扉が置かれている空間だ。

扉以外は空間が歪み、背景は虹色に輝き長時間居ると頭が痛くなりそうな場所だ。

扉は、さまざまな世界へと繋がる。時代も扉によって違い、場所も違う。「人間界」という世界があるらしいのだが、俺はまだ行ったことが無い。

そこは唯一とっていいほどの、天使と接触できる空間なのだ。あいつに会うためというのもあるが、俺は、天使をいじめるのも楽しみにしている。

キアラン 4

はっ…！

何を考えてんだ俺は……！

そんなこと考えてたら、時間に間に合わねえだろ！

俺はあわてて腕時計のほうを見た。すると、待ち合わせ時刻の二分前を指していた。

扉間は、館から遠く離れた街の公園の片隅に存在する。

街のほかの場所にもあるのだが、大きい会社の中や公共の施設などには扉間へと続く扉は無い。

「これはかなりやべえ！もう、あの方法を使うしかねえな……」

ポケットの中に入っていた、金色の鍵を取り出す。

「開け！扉間の扉。我が主に従え！」

その言葉を発したと同時に、キアランの周りを光が包む。そして、金色のきらびやかに光り輝く扉がキアランの前に現れた。

「よしっ！うまくいった」

ドアノブに手をかけ、まわして扉の中を通った。

キアラン 5

「ふう〜〜っ」

この力を使うと、無駄に魔力をつかうんだよなあ。もつと楽にできればいいのに。

疲れたせいもあり、扉にもたれ掛かった。扉にもたれ掛かったまま、数十秒が過ぎる。

「さてとっ。そろそろいかねえと、本格的に怒られるわ」

もう少し休みたい所ではあったが、重い腰をゆつくりと上げた。

え。どこだろう。たしか、少し古びた感じの木の扉だったよな。さまざまな扉がある中から、待ち合わせの目印にしている木の扉を探す。

「おっ。これっぽいな」

俺が出てきた扉から百メートルほど先のところに、少し古びた木の扉はあった。

木の扉にはガラスの部分があり、そこをのぞいてみると反射をして、自分の顔だけが映る。その顔を見ると、一番目に入るのは目だった。右目は赤で、左目は金色という不思議な目の色をしていた。俺の知っている家族は皆、両目は金色である。俺にはそれでも別にいいと思っている。

そんな事を考えながらも、扉に少しもたれるような姿勢であいつを待った。

俺が待ち始めてから、数分が経った。

「……あいつ。珍しく時間護れてねえじゃねえか……。自分が五月蠅いくせによっ……」

あいつがいらないかと思って、辺りを見渡すが、周りには人影は無い。ただ、扉が並んでいるだけである。そのため、静寂が辺りを包んでいた。

……おいおい。遅すぎるんじゃないか！

眉をひそめて再び腕時計を見ると、待ち合わせ時刻から数十分も経っていた。

「ったく。早くしろよな……」

ん？

俺がそう呟いたときに、さわやかな風に乗って、誰かの声が聞こえた気がした。風が吹いたのは気のせいかもしれない。なぜなら、扉までは自然現象が起こるはずも無いのだ。

その声は、はっきりした物ではなく、小さいか細い声だ。

空耳かとも思ったが、もう一度耳を澄ませた。すると、また同じ声が聞こえた。

俺はその声が聞こえるほうに向かって、足を忍ばせて歩いた。

なぜ音を立てない必要があるのか、俺も疑問に思ったが、何故かそのまま続ける。

どんどん近づいていくうちに、それが泣き声だということに気づく。

そして、もっと近づいていくと、少女が見えた。白いローブで顔は見えないが、俺と同じぐらいの歳でまだ若い。髪はきれいな金髪で、長い髪だ。

少女が泣いているのを近くで見るために、彼女の真後ろの扉に隠れる。

移動して行ったところは、扉が多い所から離れた、扉の少ない所だった。彼女なりに、無い手も見つかりにくい場所に來たのだろうかと思った。

……。元気づけられることはないかなあ……。でも、急に話しかけるのはダメだし……。そうだ……！

泣いている彼女にも気づくような大声で、呪文を唱える。

「空から来る迅雷よ。我に力を貸せ。雷！」

「！」

泣いていた彼女は、顔を上げて俺のほうを見る。

俺の唱えた呪文は、悪魔が使える呪文の一つだ。この呪文は、力

のある天使なら使える。そして、一番の威力が少ない攻撃呪文である。そのため、速さもさほど無い。

そんな呪文だから、避けたり、天使が得意とする防御呪文か何かで防ぐだろうと思っていた。

ドンツ。

爆発音が聞こえる。

彼女の方は、土埃で見えない。

土埃が晴れてくると、彼女の様子がおかしいことに気づいた。声も、動いている気配も無いのだ。

そして、完全に土埃が晴れたとき、攻撃してしまった彼女が倒れているのに気づいた。

「えっ……！」

俺は驚いて、彼女の方によった。

「おいっ！しつかりしろ！」

彼女の肩を持って、揺するが動かない。息はしている。

だが、背中に大きな傷ができてしまっている。その傷から出る血は、純白の服を赤く湿らせる。

……えらいことしちゃったな……。どうしよう……。あいつが来れば何とかなるかもしれないが……。待ち合わせ場所に来ねえし……。俺、回復呪文は下手だからな……。やれたとしても、傷とかが残っちゃうだろうし……。女の子だしな……。しょうげねえ！やれるだけやってみるか！

「穢れない心よ。その力を今、解放せよ！回復^{リカバ}！」

少女の周りに結界が包み込んだ。

少女の傷は、倒れたときにできた擦り傷ぐらいは治っていた。だが、肝心の大きな傷の方は治る気配はしない。

キアラン 6

……やっぱだめだな……。あいつにきてもらわねえと。さっきの爆発音で、扉間にいたら何かあったって気づいてるだろ。早く来いよなあ……。

俺は、少女をまじまじと見つめた。

彼女は、白いベールを着ている。下にはワンピースを着ており。やはり、それも白だ。ここまで白だと、天使の可能性は高い。

いままで、たくさんの天使に攻撃をしたりしてきたが、これまでの傷になったのは初めてだ。いじめてきた中では、怪我をしても擦り傷が少しあるだけだったが、ここまで大きな傷を負わせたのは初めてだった。

でもなあ……。っていうか、泣いてるから手加減までしたのに……。……。……。……。……。……。……。……。……。……。……。

ん？ 涙……。この子……。ホントどうしたんだろう？

「はああ」

重いため息を吐く。

それにしてもこのこの服……。結構いい服だよな。それに、この髪留め……。瑠璃でできてるし……。ネックレスも、金でできてるし……。……。も、もしかして貴族！……。それなら……。偉い相手に手を出しちまったてことだよな！

「はああ」

そう思うと、先ほどよりも重いため息が出た。

背中傷は、治ってはいないが悪化はしていないようで、血も止まっている。

彼女を助きたいが、何もできずに困り果てている所に、背後から声がした。

「キアラン！」

「ハンナ！ やつと来てくれたばあふあ——」

声をした方を振り返って言うと、いきなり殴られた。

赤い髪のショートカットで、眼も赤い。ハンナは、黒いドレスを着ている。だが、重いものではなく軽い物なので、普通に行動はしている。

ハンナは小さい頃から一緒に家も近かったので、小さい頃はよく遊んでいた。だが、人間で言う十歳ぐらいのときに急にハンナの家族は違う街に引っ越してしまったのだ。それから、何回か会うこともあったのだが、会うのは久しぶりである。

「何やってんのよあんたは！私との時間に合って無いし、へんな爆発音がするし、何があったのよ！……なに？この子……」

なにがあったって……。それに、俺は時間通りに行ったぞ！

「何いってんのよ！来てなかったじゃない！で、この子はどうしたの！」

……じゃあ、あれだ。同じような古びた木の扉があったんだよ。

「今はそっちの話じゃない！」

また殴られた。

ああ、ええっと……なんか、いつもみたいにいじめてやろうと思ったけど、泣いてたから、軽い攻撃にしたんだけど、もろに当たっちゃったみたい。

「はあ？なんで泣いてる女の子に攻撃するのよ！」

ええっと……。まさにその通りです……。……っていつか、本当はきつかけを作ろうと思って攻撃したんですけど、まさかこんなことになるとは思わなくて……。

「言い訳はいいの！それで、私に言うことは！」

ハンナは俺が何をして欲しいのか悟ったらしい。

「えっと、お願いします！この子を治してください」

「分かればそれでいいのよ。」

ふんつ。と、鼻で笑ってハンナは女の子の方へ行った。

俺は、ハンナがとりあえずは治してくれるということに安心し、

ほつと胸をなでおろす。

俺の作った結界では邪魔になるだろうと思い、結界をとく。

ハンナは俺の回復呪文よりもいい呪文を言い、てきぱきと作業を続けている。

そんなハンナ彼女の様子を、少し離れた所からぼんやりと眺めていて思った。

……ハンナは、攻撃呪文も守備呪文もバランスよく取れてるからなあ。勉強もできるし、かわいいし、性格もいい。ま、他の男子から言わせれば文句なしなんだろうけど。結構きついんだよなあ。

ははっ。まあ、自分では仲良くやってるつもりだけど。

たまに誤解する奴もいるけど、俺とハンナは恋人ではない。ただの腐れ縁だ。まあ、そう言ったとしても疑わしい目で見られるけどな。そんなことをぼんやりと、思っていると急にハンナが声を上げた。

「よしっ！できた。時間が掛かったけど、これで大丈夫でしょ。」

ハンナが、彼女の治療を始めてからまだ五分しか経っていない。あれだけの傷だったのに。

……これで時間掛かったとかどうなんだよ……。これで時間掛かるんだったら、俺はどうなるんだよ！それに、傷を治す前より肌とか綺麗になってないか？

「さっすが、回復能力Sだけあるなあ……」

ハンナは、少し顔を赤らませてそっぽを向いた。

「ふんっ。これぐらい当たり前よ！」

そのまま、すたすたと歩いて、俺達が見えるぐらいの離れた所で俺達を見ていた。

「……………」

まあ、いいや。

キアラン 7

彼女はこういう状況で泣いていたのかも分からず、すっきりしていない。

このまま、帰るわけにも行かず、彼女が起きるまで待つことにした。

「おいっ。こっち来いよ。」

ハンナは、反抗することなくよつてきた。

「なによ？」

「どうなんだよ？この子の様子。なんか問題ありそうか？」

「うん。今のところは特に問題ないわ。」

「ふん。そっか」

その一言を聞いて、少し安心する。俺のせいで死なれても困るかな。

俺らは、彼女が起きたときにびくりさせるのも悪いと思って、少し離れた場所に行つて様子を見ることにした。

「そっいえばさあ。おまえ、何のようだったんだよ？」

「えっ？」

ハンナは、少し驚いたようにして言ったが、すぐに応えた。

「な、なんでもないわよ！た、ただ……」

ちよつと、顔を赤めらせてそっぽを向いてしまったハンナ。

「？」

そんなハンナの事を不思議に思いながら、彼女の方を向いた。すると、ゆっくり起き上がろうとしている彼女がいた。

「……………ここは、どこ……？」

彼女は、きろきろと辺りを見渡している。

そんな彼女の様子を見ながら、俺は近づいていった。

「よおっ！」

「！」

びくんつと大きく体を震わせた彼女は、恐る恐る俺のほうを振り返った。

彼女は、青ざめた顔で俺のほうを見ている。攻撃されたのが自分だと分かっているのだろう。ひどく怯えていた。

「……だいじょうぶだって。なにもしねえよ。俺は、キアランって言っただ。」

「……………」

まだ、俺の事を警戒している。

「名前は？」

「……………フィオナ……………」

キアラン 8

以外にも凜として、でもかわいらしい、透き通るような声でそう呟いた。

俺は、フィオナのローブをどける。そこからのぞいたのは、黄緑色の綺麗な瞳だった。整った顔立ちに、少し幼さが入っている。

「……………」
綺麗だなあ……………」

「あの……………」
ぽうつとして見ていたのにどう対処したらよいのか分からないように、おどおどしている。それに、たぶん気づいているのだろう。俺が天使と対立する悪魔だということに。

単刀直入といっても良いほどだが、

「なあ、フィオナちゃん。どうして泣いてたの？」
などと聞く。

彼女を傷つけないように、なるべく明るく言っただつもりなのだが、彼女の瞳からは、一筋の滴が流れ落ちた。

「……………」
ぎゅつとして、俺はフィオナを見つめる。それで、おどおどするのはこちらの番だった。

「私……………」お父様が、仕事の人と、けんかするのを見ちゃって……………。怒つてるときのお父様は、眉を吊り上げていてとっても怖いし……………。そんなんだから、お父様は嫌われちゃって。誰も争ったり、ケンカしてる所なんか見たくない……………」

フィオナは、泣きながらそう語った。

——俺じゃ考えられないことだな……………。それにしても、そんなことでそこまで泣かなくても……………。

今もなお、彼女は泣きじゃくっている。

「……………」

どう対応していいのかも分からず、彼女が泣き止むのを静かに待っている事にした。だが、遠くから見ていたハンナが、突然俺の真横に現れたのだ。

「あんったねえ！そんなことでぐじぐじしないの！折角のかわいい顔が台無しじゃない！」

フィオナは突然現れたハンナを見て目を見開いていた。それでいて、泣くのは一旦やめた。それは、驚いているせいでもあるのだが。ああ……。面倒くさいな。そういえばハンナってこういうの嫌いだっけ。

フィオナは、俺が出てきたときと同じように怯える。それを見て、あわてて説明をする。

「えっと、こいつはハンナって言うんだ。家も近くて、小さい頃からいたから幼馴染っていうやつだな。まあ、俺から言わせたら腐れ縁だけど。」

「何ですって！聞き捨てなら無いわねっ！」

それから、ハンナと言い合っているうちにフィオナも見えていて、自分に危害を与えるつもりは無いのだということを悟ったようだ。

「くすっ」

キアラン 9

フィオナは、ハンナと俺が言い合っているのを見て小さく笑った。笑ってしまったのに気づいて、口を押さえて顔を赤めらせた。

ハンナと俺はお互いを見合い、小さく笑った。

「もう、泣かないのよ。折角綺麗な顔なのにもったいないわ。」

「……はい」

あとな、敬語じゃなくて良いんだぜ！どうせ知り合っただんだから。

「でも……」

「良いの良いの。私のことは、ハンナって読んでちょうだい！」

俺のことはキアランって呼べよな。

「あの……どうせなら、私のこともフィオナって呼んでもらっても良いですか……？」

もちろん！

「私も良いわよ。どうせ知り合っただんたもの。折角だから。」

ハンナは、珍しく優しい。もうちょっといつもならきつく言うのだが、まあ、気が合うならいいか。

「あの……これもっていてもえませんか？」

彼女は腰に掛けている小さい鞆から取り出して、おずおずと差し出した。

「「石？」」

見事にハンナと声がかぶった。

「簡単に言えば石です。天界で使われている物です。石によって能力も違います」

どこからどう見ても、ただの丸い白い石であるからであるからである。

「この石は何の能力があるの？」

「えっと……それは言えません。でも、貴方方には害は無いです」ハンナはフィオナの手から、ひょいっと石を取る。そして、それ

をじつと眺めている。

俺も、フィオナの手から石を持ち上げる。

「ふうん？」

ハンナは石に対して警戒しているようだ。なんせ相手は天使だし、もしかしたらオレ達の力が弱まる物かもしれない。だが、俺は石を観察して見たが、天使の魔力を感じるだけで何も無かった。

「そんなに警戒しなくても良いですよ。貴方方は敵じゃないし、ましてや悪魔でも無いでしょう？」

俺とハンナは、顔を見合わせる。

違うぞ？

「へっ？」

フィオナは目を見開いてきよとした声を漏らす。

「そうよ。私達は、天使とは違う。私達は、悪魔なんだから。」

「へっ……え……？」

フィオナはその言葉を聞いて、意味が分からないといったように頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいる。

「だって……泣いている私に優しく声をかけてくれたじゃないですか。」

……その前に、俺がおまえを攻撃しちまったのを忘れたのか？

「あっ……」

フィオナはその事を思い出したらしく、頭を抱えてしゃがみこむ。そのまま何かを小さく呟いている。

「そんな……悪魔なんか……石を渡しちゃったなんて……」

そんなに言わなくても……。それに、悪い悪魔ばっかってワケじゃないんだぜ。少なくとも、俺達はいいほうの悪魔だと思うぞ。

「そうよ。まあ、キアランはたまに天使をいじめたりしようとしてるケド。」

「うるせえ！」

フィオナは俺の言葉に信用したらしく、微笑んだ。

「今もこうして、私に攻撃してこないということで、良い方の悪魔だということは信じます。でも、天使をいじめるのはよくないことだと思います。」

はい……すみません。

俺が方を上げると、ハンナも続ける。

「そうね。その癖は直しなさい」

はい……ほんと、すみませんでした。

「ふんっ。わかればいいのよ。」

「くすっ」

フィオナは、そんな二人のやり取りを見ていて、再び微笑した。それを見た、俺とハンナはまた笑い出す。

三人が笑って、和やかな空気が流れていた。だが、そんな空気を打ち壊した物があつた。

フィオナの腰に掛かっている小さい鞆から、「ピーッ ピーッ」とアラームのような音が流れたのだ。

「あっ……」

フィオナは、その音を聞いて顔を曇らせた。

「ん？なんだ？」

ハンナも、不思議そうにフィオナを見ている。

「あの……。すみません。ここにいたいのは山々なんですけど……呼び出しがあるので……」

「そんなものがあるの……？たいへんねえ。また、会いましょう？」

「ええ。それじゃあ……」

「おうつ。じゃあな！」

フィオナは軽くお辞儀をするどこかえかけていつてしまった。

フィオナが駆けていく姿が見えなくなったところで、俺達も歩き出した。しばらく歩いた所で、歩きながらハンナに話しかける。

「なあ、フィオナ……大丈夫かな？」

「……………そうね。どこか……思い詰めてたところがあるように見えただけ……。大丈夫よ。そんなに心配しなくても。」

そうか？

「何よ。天使の心配なんてするの、珍しくない？あんたは、いつもいじめて終わりだったじゃ無い。」

ハンナは俺がフィオナを心配するとニヤニヤとハンナは笑う。

別にいいじゃねえか。それに……

「それに？」

ハンナは口調が変わったことに気づき、俺の顔を不思議そうにのぞきこむ。

「それに……何か嫌な予感がする」

「なんで？」

ほら……あのこの服とかさあ、結構いい服だったじゃん。

ハンナは、そう言われて首をかしげて考える。そして、手を叩いた。

「ああ。確かに結構いい服装だった。それがどうしたのよ」

分かんねえのか？……だからさあ、天使の中の貴族とかの娘とかじゃないかと思つて。そうしたらさあ、もし悪魔がフィオナを攻撃したとすれば、地界にでも戦争を仕掛けてくるんじゃないかって。

「……………」

ハンナは難しい顔をするが、すぐに明るいつ声になつて言つた。

「考えすぎよ。それに、そのときはそのときよ」

そんなハンナの考えを聞いて、ふつと微笑する。

「ああ。そうだな……。ところで……もう一度聞くけどまへの用つてなんだつたんだよ。」

ハンナは、その話に変えられ顔を赤く染めた。

「なんでもないつて言つてるでしょつ。本当にたいしたことはなかったの。その……久しぶりに会つたんだし、そこかに遊びにいいところがある、つて思つてただけよ。」

「えつ！ そうなのか？ それなら行きたかつたな……。……じゃあさあ、また今度行こうぜ。」

ハンナはそれを聞いて、さらに顔を赤くする。

「ふんつ。今度ね」

ハンナはぶっきらぼうにそう言う。

「ははつ。面白い奴だな」

「もうつ。なんなのよ」

俺はハンナの言葉どおり、気にしないでいようと思つた。

だがもう少し先の時に、俺の思つたとおりの事が起きるのだが、そんなことは今の俺には分からなかつた。

もう……見つかっちゃったんだ。屋敷から抜け出てきたの……。キアランとハンナと分かれてから、自分の屋敷に戻るために走っている途中だった。ずっと走り続けているため、息はとづくに切れている。

「やっと、着いた。」

一つの扉が目の前にあった。その扉は金でできており光沢がある。扉はのドアノブには鍵穴がついており、鍵がなければ入れないようになっている。

腰に掛けていた小さな鞆から同じような金でできた鍵を取り出す。そして、その鍵穴に鍵を差し込んだ。

すると、「カチリッ」と小さな音がして、鍵が開く音が小さくなった。

ドアノブに手を掛け、くるりと回した。すると、ドアはすんなりと開き私は迷わずにその中に入った。

中に入ると、そこには何も代わらない自分の部屋があった。薄いピンク色のカーテンのついたベッド。小さな茶色の勉強机。さまざまな本が並んだ本棚。そして、窓から見える綺麗な町並み。それは、私にとって当たり前の風景だった。

だが、いつもと違っていた。その違和感は、すぐに何か分かる。

部屋には以上は無いのだが、廊下から聞こえるざわめきだった。

私は、何を話しているか気になり、廊下に繋がる扉に耳を当てて聞いた。

聞こえてきたのは、屋敷に使っている家政婦たちの声だった。たまに家政婦たちが話しているには聞いた事があることはある。そして、聞こえてくる内容はほとんど同じである。

「……旦那様は、いつも以上に不機嫌よ……」

「本当に。先ほどなんか、お食事を運んだときに『早く出て行け!』」

と怒鳴られたもの」

「まあ。そうなの？ 旦那様はいつも口五月蠅いの、それ以上に口五月蠅くなるなんて」

「そんなときに限って、お嬢様も勝手に屋敷を出て行ってしまつて今日は本当に大変だわ」

三人の家政婦の声が聞こえる。

「お嬢様が屋敷を勝手に抜け出したなんて旦那様の耳にはいれば、怒られるのはわたしたちですものねえ」

「ほんと。大人しくしていてくれない物かねえ」

「でも、お嬢様は仕方ないじゃないですか。だって、お母様はお嬢様の小さい頃になくなられて、あの口うるさい旦那様と一緒に暮してるんですから。それに……今日はお母様が亡くなられた日ですよねえ」

「そういえばそうですね——」

私は、ある程度の家政婦の話を聞いて、深いため息をついた。

小さな棚の所に移動し、写真を手に取った。写真には、金髪の顔の長い美人な女性が左側に、同じく金髪で肩ぐらゐにまでの豚髪を括った男性。その間にいるのが私だ。

三人とも嬉しそうに微笑んでいた。

私はこの時の事をおぼえている。この写真を撮ったのは、五歳のときの誕生日だった。その日には、大きいケーキを食べて、ご馳走を食べて、みんなで楽しくお祝いしていた。

だが、そのお祝いをしたその夜に、母は突然倒れたのだ。母はもともとからだが弱く、病気もしがちだったが死に至るほどでもなかった。

だが、母は突然倒れたのだ。

倒れてすぐに屋敷にいる腕前のよい医者に見てもらったが、不治の病にかかってしまっている事を伝えられた。母は私の誕生日のずっと前から体に違和感を感じていたと思うのだが、それを隠して過ごしていたのだと言う。

そのときの私は医者も父も家政婦たちも何を言っているのかは分からなかった。だが、母が倒れて、その母は顔色が悪くて死んでしまいうんじゃないか、ということだけは五歳のときの私は悟ってしまった。

それを悟ったと同時に、私はその場で泣き崩れたことは覚えている。そして、私の誕生日の日に母は亡くなった。

母親の葬儀の日も泣き崩れて泣いた覚えはある。

父はその場では泣かなかったが、きっと私や家政婦がいないところで静かに泣いていたのではないかと今は思う。

それ以来、私は自分の誕生日は嫌いだ。普通ならば、誕生日はとても喜ばしい日だけれど、私にとっては一年の中で一番嫌いな日だ。

父は、六歳の誕生日のときに「お祝いをしなくてもいいのか？」と聞かれて、私は「しないしてほしい」と答えた。母が亡くなった日にお祝いなんてできるはずがなかった。

そして、父にも真情の変化があった。私に対しても家政婦や使用人に対してもだ。母が亡くなる前までは、わがままは許さない父だった。

だが、優しく暖かい人だった。それが私の思う父だ。

だが、今は違う。母がなくなってから少して父の様子は変わっていった。だんだん、人とかかわりを無くすようになっていった。そして、関わりなくなつて上に、関わつたとしても冷たくなつた。そして、母が亡くなつたことから目を背けるように面倒くさがりで仕事をしなかつた父がしっかりと仕事をするようになり、おまけに部下の仕事までもするようになった。

私は、そんな父になつてから寂しかった。私にはまだかわりを持つてくれるものの、前のような父ではないと思うと寂しいのだ。

だが、父に関わりを持つてくれるのが自分だけだというのが私は嬉しかった。

でも、父は私以外の人。人だけでなく、動物や者にまで厳しくなつた。

父は母を愛しており、私の生まれる前でも幸せに暮していたのだらう。そんな長い中、突然母の命は消えたのだ。

母はもうここにはいない。

そう考えただけで私は悲しかった。母の思い出も少ない中、他の親子で娘と母が楽しそうにしゃべっているのを見ると、私はそれではないなあ……と思うこともある。

私は母の面影が残るように、三人の写っている写真を手にしている。

だが、父は母の面影のある物は母の部屋に全てがしまつてある。

私は母の部屋には母が亡くなってから入ったことは無い。無論、父も入っていないだらう。

母がいつでもいてくれないだらうか……………

ポタポタツ。

写真たてに滴が零れ落ちる。

私はあわてて手で涙をぬぐった。

今、私は泣くつもりは無かったのだ。だが、自然と涙が零れ落ちてしまう。

そうだ……。こういう気持ちのときは、あそこに行こう……！

私は、涙をぬぐい部屋から出て行った。

私の家が所有する敷地の中の庭へ移動した。

真紅の赤いバラ、色とりどりのチューリップ。たくさんの花々たちが集まって、楽しく会話をするのだ。天使は自然の声を聞くことができる。そのため、母が亡くなってからも庭に行つて会話をするのだ。それが日課である。

ここはいつでも母の面影がある。母が大切に育てた植物。母が受かつていた道具。母がここにいてもおかしくないぐらいだ。

唯一父が面影のあるものを見えるところにおいているのがこの庭だ。自分ではしていないが、使用人に母の大切にしていた庭の手入れをさせている。目に付く物だからだろうか。父は母の大切にしていた庭はしっかりと手入れをしている。

屋敷の廊下から見えるところにその庭はあり廊下を通ると父がどこかその庭を寂しそうに、でも懐かしさが混じったような顔で眺めていたのを見たことがある。それは、なぜだかは分からない。父と母で何か大切な思い出でもあるのではないかと思った。

私は庭に座り込んだ。近くにあった花を静かに見つめる。

ぽうつとしていると、私の左肩に黄色い小さなかわいらしい鳥が止まった。その鳥は心配そうに見つめて語りかけてくる。

『どうしたの？今日は元気が無いね……』

「そう……?」

『ええ。……………そういえば、いつもこの日は元気が無いのね』

この鳥は三年前にこの屋敷に住み着き始めたとりで、母のことは知らない。

「なんでもないわ。大丈夫大丈夫。あのね、今日は新しいお友達ができたの!」

鳥には余計な心配を掛けたくないので、母のことは言わない。それで、わざと明るい話にしようとする。

『へえ……!どんな子のなの?』

えつとね……二人いるんだ。一人はハンナちゃんって言って、ちよつときついけど、根はいい子だと思うの!

私はいつもの笑顔になって言った。それを見て安心したようで、鳥のほうも顔が明るくなる。

『もう一人は?』

「もう一人は……………キアランっていう、男の子なの……………。黒い長い髪に、右目が赤色で左目が黄色なの。」

『……………ねえ……。その人……………もしかして、悪魔なんじゃない?』

鳥は声のトーンを一回り低くする。私はその声を聞いて、何か嫌な予感がした。悪魔と知り合った時点で不安はいっぱいなのだが。

え……？どうして分かったの？

『だって……地界の悪魔で、その目を持った者は……』
者は？

鳥の声色が更に低くなったので、真剣になつて鳥に言った。

『伝説の悪魔「サタン」を呼び出すことのできる者だって……、聞いたことがあるの。地界にいるある家の者で、その目を持った人じゃなきゃいけないけど』

でも……その人はそういう感じじゃ無かつたよ。

悪魔は安心できる存在でも無いのに、あわてて否定した。そのときは、どうして否定したのかさえ分からなかつた。

『でも……用心にこしたことは無いわ。注意しておきなさい。もしかしたら、そのキアランって言う人は、その人の血を受け継ぐ人かもしれない……。だから、その力を持っているかも……』

えっ……！

私の顔が一気に真っ青になるのが自分でも分かる。

鳥は慌てて言った。

『大丈夫よ。例えの話。まあ、大丈夫だとは思つわよ。』

「そうよね……」

私は何故か顔を伏せた。そのときに真新しい腕時計が目に入った。その時計を見て勢い良く立ち上がる。

その勢いで、鳥は落ちるが翼でゆっくりと羽ばたいたため、落下はしない。

「いつけない！ごめんっ。もう時間だから行かなくちゃ。」

『そう？じゃあ、また明日！』

「うん！」

そう言つて、鳥のほうを振り返りながら手を振つた。そのため、足元に注意が向かず、段差でこけてしまう。

それを見た鳥は、小さな声で呟いた。

『大丈夫かしら……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9610y/>

キアラン

2011年12月2日17時50分発行